

論文の内容の要旨

論文題目 英国文化における「ロウワー・ミドル・クラス」イメージの
成立と表象—ダニエル・デフォーからカズオ・イシグロまで

氏名 新井潤美

英国において「ロウワー・ミドル・クラス」という存在はいくつかのはっきりとしたイメージを伴うものでありながら、英国の文学においても歴史においてもあまり研究の対象となっていなかった。歴史家のジェフリー・クロシク（Geoffrey Crossick）はその著書『イギリスにおけるロウワー・ミドル・クラス—1870–1914』(*The Lower Middle Class in Britain 1870–1914*; 1977年)の序文において、このことの原因として、ロウワー・ミドル・クラスという階級が歴史において目立ったことをしていないということを挙げている。つまり従来の歴史研究において、彼らの存在感が薄いということだが、文学においては、19世紀後半以降の小説や演劇、そして文芸雑誌を見てみると、ロウワー・ミドル・クラスは主に揶揄や諷刺の対象として、時には同情や侮蔑、あるいはリスpekタビリティの裏に凶暴性を隠し持った、脅威的存在として、様々に、そして頻繁に描かれるのである。しかし文学におけるロウワー・ミドル・クラスの表象を扱った評論もそう多くはない。従来、ミドル・クラスの中でも特に「ロウワー・ミドル・クラス」を取り上げて、一つの別の階級として扱うには一種のタブー感さえあった。

さらに、ロウワー・ミドル・クラスを特にとりあげて論じた歴史研究書あるいは文学研究書が少ないのは、「ロウワー・ミドル・クラス」という階級が、は

っきりとしたイメージを伴いながらも、その実体は漠然としているという矛盾をはらむからでもある。言い換えれば、「ロウワー・ミドル・クラス」という言葉によって、「上昇志向がある、リスペクタブルである、事務員、郊外の家、スノッブ、保守的、現状維持」等、いくつかの概念や要素が連想されるが、その実体は、読み書きと簡単な計算ができるほどの教育を受けた百貨店の店員や事務員から、大きな屋敷で訓練され洗練された上級使用人等のワーキング・クラス出身のミドル・クラス新参者、そして両親がロウワー・ミドル・クラスである、ミドル・クラス出身のロウワー・ミドル・クラスまでと、範囲が広い。

本論ではこの曖昧で多様な「ロウワー・ミドル・クラス」のイメージを英国の文学および文化における様々な表象をとおして辿っていくことによって、新たに勢力を増してその存在感を大きくしていったロウワー・ミドル・クラスがアッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスをどのように脅かしていったか、そして彼らが諷刺、揶揄、非難の対象となっていたかを考察する。まず第1章では「ロウワー・ミドル・クラス」と呼ばれた階級について、その実体と表象を分析し、彼らについてのイメージとステレオタイプがどのようにして作られていったかを辿る。第2章では、「ロウワー・ミドル・クラス」という言葉が英語の語彙に入る以前から、アッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスにとって最も身近な存在であった、執事、従僕、ハウスキーパー、乳母といった「上級使用人」のイメージを取り上げ、彼らが「ミドル・クラス」のリスペクタビリティを身につけた安全な存在であると共に、その身近さゆえに脅威ともなりうる様を見て行く。第3章の前半では、19世紀後半にその数が急増し、存在感が大きくなっていった、「ロウワー・ミドル・クラス」の典型的な人物、「事務員」(clerk)の様々な表象をとりあげ、彼らのイメージがアッパー・クラスおよびアッパー・ミドル・クラスにとっての喜劇的な存在、諷刺の対象となっていく過程を考察する。そして後半ではこういった喜劇的なイメージが、ロウワー・ミドル・クラス出身の作家たちによっていかに脱喜劇化されていったかを、いくつかの文学作品を中心に見ていく。第4章では、ロウワー・ミドル・クラスをミドル・クラスとならしむ「教育」について、イギリスにおいて「教育」が何を意味するか、「教養を身につける」ことの含意とスティグマについて、イギリスのアッパー・クラスとアッパー・ミドル・クラスの伝統的な教育施設の「パブリック・スクール」の誕生と発展、そのイメージの定着を辿り

ながら考察する。第5章では、ロウワー・ミドル・クラスとの関連が最も強い、「郊外」について、そのイメージとステレオタイプを追っていく。そして結語においては、「ロウワー・ミドル・クラス」のイギリス文化における意味をまとめると共に、それが現在のイギリスの文化とアイデンティティにおいてどのような位置を占めるのかを論じる。

これまで「ミドル・クラス」という言葉の曖昧さ、多様性、柔軟性、この階級のイメージと実体については研究がなされてきた。しかし、本論ではその中でも敢えてこれまであまり取り上げられてこなかった「ロウワー・ミドル・クラス」に焦点を当てて、それが英国文化において重要な存在であることを提示していきたい。